

●学部学科再編から4年、今とこれから

独自のカリキュラムや卒業要件で力を引き出す!

真のグローバル人材を 長崎から世界へ—— 国際経営学科の学生は 4年間でどう変わったか

企業などからグローバル人材を求める声が増え、高まる中、その育成で成果を上げているのが長崎県立大学国際経営学科だ。どのような思いで学生と向き合っているのか。岩重聡美学科長に聞いた。

意見や感情が衝突しても
立ち上がり、前に進む力を

——この春、国際経営学科の1期生が卒業します。入学以来、4年間見てきてどのような成長を感じますか。
岩重 多くの学生が、国内と海外を分けることなく、ビジネスや物事をとらえられるようになっていと感じます。グローバルという言葉の本来の意味のとおり、地球的、包括的な視点が出てきたことが一つの成果。就職活動においても、皆、国境をあまり意識することなく、自分のやりたいことを大事にして志望先を選んでいました。

——国際経営学科は「真のグローバル人材の養成」を掲げています。具体的な教育内容について教えてください。
岩重 例えば英語については、TOEIC®スコア730点以上が卒業要件。1年次には3週間の「海外語学研修」を必修としています。また当然ながら、経営理論を体系的に学べるカリキュラムを設定し、国際経営の現場で武器として使える知識を身に付けてもらう。そうした指導を行っています。

グローバル人材に求められるスキルを教え上げれば切りがありませんが、英語力や経営の専門知識、またそれを支える一般教養を備えていることは、ある意味前提。進級、卒業の要件を設けて、徹底的に指導をしています。

——そうした学びの中で付けた自信が、グローバルな視点につながっているわけですね。

岩重 そうした部分もあると思います。ただ、どんな知識やスキルもそれを現場で活かすには、「活かし方」を知っておく必要がある。なので、国際経営学科の授業では、教員陣が同時にそのことも意識するようにしています。

——どういうことでしょうか。
岩重 「なぜそう考えたのか。データを示して説明するように」というのは、私たちがよく学生に掛ける言葉です。肌感覚で物を言うのは日本人の特質ですが、国際社会ではそれは通用しない相手に納得してもらうには、明確なエビデンスやそこから論理的に導かれる予測が求められます。だからデータをきちんと見つけ、それもメジャーな情報だけでなく、マイナーなものにも目を向け、自分の発言の根拠を示す訓練をさせています。

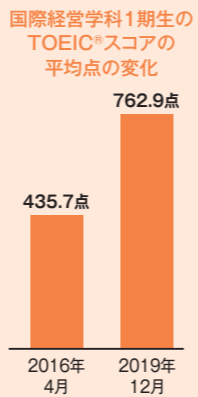
一方で、データに基づいて物事を論理的に考えるには、専門的な知識が必要になる。知識とその活かし方、コミュニケーション力をバランスよく鍛えることを私たちは大事にしています。

自分を深く理解することで
実のある議論ができる

——3年次の「海外ビジネス研修」も必修です。狙いはどこにありますか。

TOEIC®の平均スコアが320点以上アップ 実践力を支える国際経営学科の取り組み

全学で実践的な学びを重視する長崎県立大学。国際経営学科における学生の英語力の向上はその実績の一つだ。2016年4月時点で435.7点だった1期生のTOEIC®平均スコアは、2019年12月時点で762.9点まで上昇している。



フィリピン・セブ島での「海外語学研修」を含め、1、2年次を中心に英語を集中的に学習。日常会話はもちろん、英語のニュースが理解できるレベルを目指している。

また、3年次の「海外ビジネス研修」も実践力の養成を目的としたものだ。シンガポールやタイ、ベトナムの企業、団体に就業を体験する。現地訪問前には、訪問国や当該業種の事前研究を行い、帰国後は報告会も開催し、体系的な学びの場としている。



海外ビジネス研修では現地企業などで約3週間就業する。

学生に「なぜそう考えたのか」と問い 自身の発言の根拠を示す 訓練をさせています

岩重 英語力や学んだ知識を現場で試してもらおう。これが目的に違いありませんが、むしろ多くのつまづきを経験してほしいと思っています。グローバル社会ではさまざまなコンフリクト、意見や感情の衝突が生じます。まして信仰の違いなどあれば、それを理屈で解消することは難しい。学生たちには、そうした現実の一端を知り、その中でもなんとか立ち上がって前に進むことの大切さを実感してほしいと考えています。実際、どんな企業や団体でも業務の中で日々衝突や対立は生まれるはず。それを乗り越えられない人材

は、いくら優秀でも必要とされないでしょう。
——多様性が重視される社会の中で、そのほか国際経営学科として重視していることはありますか。
岩重 お話ししたとおり、違いを受け入れ、その上で議論やコミュニケーションを行える力がやはり大事だと考えています。実はそのためには、自身自身を深く理解していることが欠かせません。自分はどういう人間で、何を考え、何がしたいのか。そうした核があるから、相手と実のある議論ができる。その意味では、多くの他者と出会える

海外ビジネス研修なども自身を掘り下げる機会にしてほしいと思いますし、4年間を通じて学生一人一人がアイデンティティを確立するサポートをしていきたいと教員陣は考えています。
——今後の抱負や読者へのメッセージをお願いします。

岩重 企業の経営者の方とお話しすると、海外の拠点でオペレーションを担当する技術者も必要だが、今は組織をマネジメントできる人材のニーズが高まっていると言われます。まさに私たちとしては、将来的にそうした役割を担える人材を育成していきたいと考えています。

繰り返しますが、その実現のために語学や経営の専門知識については独自のカリキュラムを組み、対応の

厳しさを持って教育にあたっています。おかげさまで、TOEIC®スコアなどでは一定の成果を上げることもできました。とはいえ、国際ビジネスを取り巻く環境は刻々と変化しています。今後も最新の経営理論やケーススタディを授業に取り入れながら、留まることなく先を見すえた教育に取り組んでいく考えです。

日本の西の果てとも言われる長崎から世界に通用するグローバル人材を一人でも多く輩出することが私たちの責任であり使命。1期生の活躍を願いつつ、講義や研修の内容をさらに進化させ、引き続き実践力、人間力を備えた人材を育成していきますので、ぜひ長崎県立大学国際経営学科に注目していただきたいと思います。



岩重聡美 (いわしげ さとみ)

長崎県立大学 学長補佐(国際交流・留学支援担当)
経営学部 国際経営学科 学科長

福岡大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得満期退学。2008年長崎県立大学経済学部教授、16年より国際経営学科の学科長を務める。博士(国際学)。